

家庭科研究部会

I 研究テーマ

「感じとり体験して自立的に生きる基礎を培う授業のあり方」
～自ら生活をよりよくしようと工夫する子どもの育成～

II 研究テーマ設定の理由

子どもたちは、生活環境や社会環境の変化が著しい社会状況の中で日常生活を送っている。食生活を取り巻く環境の変化にともない、食品の安全性に対する信頼が揺らいだり、偏った栄養摂取など食生活の乱れや肥満傾向の増大なども依然として指摘されていたり、課題は多い。こういった現状の中で、食に関する正しい知識と望ましい食生活を身につけ、それを子どもたち自身が生活を向上させるために役立てたり実践したりしようとする態度を育てていく必要がある。成長期にある児童にとって健全な食生活は健康な心身を育むために欠かせない。

本部会では、昨年度、「食」領域の指導に取り組んできた。子どもたちに「食」へ関心を向けさせ、よりよく生きていくためにはどうすればよいのかという課題意識をもたせ、自立的に生きる基礎を培うことへ結びつけられるような授業をめざし実践を行った。その成果として「自分の食生活を振り返ることができた」「『食』を通して、食べるということだけでなく環境面からも食生活を考えることができた」などがあげられたが、一方で課題として「食の安全など消費者としてよりよい生活づくりをするための情報や物を選択する力をどのように育てていくかについても目を向ける必要がある」ことや「発達段階に応じた『食』に関する適切な支援や保護者への発信も継続していくことが重要」「内容を知識として教えるだけでなく、興味をもって調べたり実践したりできるような授業の工夫をしたい」などがあげられていた。

そこで、本部会では継続して「食」領域の実践に取り組むことにした。「食べる」という行為は、毎日の生活の中で繰り返され、子どもたちも関心を寄せている。より自分の生活に密着した学習を通して、自ら生活をよりよくしようとする実践的な力を高めていきたい。

III 研究の経過と内容

第1回	4月10日	組織作り・テーマについて
第2回	5月14日	研究日程・研究内容について
第3回	6月17日	「食」についての授業構想の検討・実践授業の報告
第4回	8月7日	実践授業の報告
第5回	8月20日	すぐ実践に生かせる簡単クッキングの視点からの調理実習
第6回	9月4日	実践授業の報告
第7回	10月2日	実践授業の報告・県教研に向けて
第8回	11月4日	実践授業の報告・県教研の還流報告・実技講習会
第9回	1月27日	研究のまとめ・来年度に向けて

「はるをあじわう～ヨモギ団子～」	千代田小
「3つのグループの食べ物を味わおう」	湯田小
「調理をしよう」	石田小
「1食分の献立を考えて家族に喜んでもらおう」	山城小
「きゅうしょくをたべる」	貢川小
「工夫しよう朝の生活」	北新小
「野菜をゆでてみよう」	貢川小
「はじめてみようクッキング」	貢川小
「お誕生会をしよう」	新紺屋小
「わが家の名シェフ」	中道北小
「じょうずに使おう物やお金」	附属小
「元気な毎日と食べ物」	国母小

(実践事例)

第5学年 家庭科学習指導案

1 題材名（単元名） 「元気な毎日と食べ物」

2 題材について

現代は児童がコンビニなどで手軽に食べ物を買うことができる時代であり、どの児童もそういった経験がある。また食事についての意識も薄くなってきている。本題材では、児童が日頃口にしている食品に目をむけさせ栄養的な特徴や組み合わせについて学習する。また、日本の伝統的日常生活であるごはんのみそしるの調理ができるようにすることがねらいの一つである。ごはんのみそしるを中心にバランスのとれた食事のよさに気づかせることで、自分の食生活に対する関心を高め望ましい食習慣を育てていきたい。

3 児童の実態

児童の調理に対する興味・関心は高く、一学期のゆで卵とゆで野菜のサラダの実習にはとても意欲的に取り組んだ。また、家庭での実践も前向きに取り組む、学習したことをもとに自分なりに工夫をした児童も多かった。児童の食生活については、給食の様子からバランスよく食べることは理解しているものの実際には好き嫌いが多く偏食傾向にある児童も少なくない。ごはんのみそしるについては、家庭でつくった経験のある児童も数名いる。しかし、栄養面や食品の特徴、あるいはおいしくつくるためにどうしたらよいかなどということまでは理解していない。

4 題材の目標

- 毎日の食事や使われている食品に関心をもち、バランスを考えた食事をしようとする。
- 食品の栄養的な特徴や食品の組み合わせに関心をもち、
- ごはんのみそしるに関心をもち、調理することができる。

5 指導計画（全11時間）

- 第1次 どんな食品を食べているだろう（1時間）
- 第2次 五大栄養素のはたらきと食品のグループ（1時間）
- 第3次 バランスのよい食事をしよう（2時間）
- 第4次 ごはんのみそしるをつくらう（7時間）本時3，4／7

6 展開（第4次 第7，8時）

- 目標 ○だしや作り方によって、みそしるの味にちがいがあること気づくことができる。
- みそしるをつくり方がわかる。

過程	学習活動	学習支援	備考
つかむ	1 おいしいみそしるのつくり方を調べる。 ・だし・実の取り合わせ ・みその選び方 ・材料の切り方 ・実を入れる順序	・家庭で調べてきたおいしいみそしるをつくるコツを発表させ、みそしるづくりにつなげる。	だし みそ 実
深める	2 みそしるの飲み比べをする。 ・かつおだし ・こんぶだし ・にぼしだし ・だしなし	・おいしいみそしるには風味旨みのあるだし汁をとる必要があることを実感させる。 ・だし汁にもいろいろな種類があることを知らせる。	みそ汁 4種類
まとめる	3 だしのしたごしらえをする。 ・だし汁をつかったみそしるとみそが入っただけのみそしるを飲み比べる。 ・いろいろなだしの取り方を知る。 ・だしの下ごしらえをする。 4 手順を確認してみそしるをつくる。 ・身支度、手洗い ・材料・用具の準備 ・みそしるづくり ・試食、あとかたづけ 5 実習に向けて課題を話し合う。	・だし汁は少し多めに用意させる。 ・みそしるを沸騰させると味が落ちることも確認させる。 ・安全に気をつけさせる。 ・みそ汁の実を考えさせる。	ワークシート1 掛図 ワークシート2

7 学習を終えて

- ・おいしいみそしるをつくるためにみそしるの飲み比べを取り入れたが、学習内容が多く2時間ではおさまらなかった。時間的なことを考えると昆布だしやかつおだしは取り扱う必要はなかったのではないかと考えたが、こんぶやかつおぶしでだしをとることを知らない子ども達も多かったので、だしによっても味が違うことを知ってほしいと思った。しかし、飲み比べたことで、だしが違ふとみそしるの味が違ふこと、おいしいみそしるを作るには、だしは欠かせないことを実感することができた。
- ・給食で出るみそしるには、にぼしがよく使われていることから、にぼしでだしをとったみそしるはなじみ深かった。また、しばらくは給食でみそしるが出ると何のだしが使われているか子どもたちの話題になり、献立表で確かめる姿も見られた。
- ・最近では様々なだし入りの味噌を使う家庭やだしのものを用いる家庭も多く見られたが、どれも肯定しながら、その中にもだしが含まれていることを確認した。
- ・だしをとった後のにぼしやかつおぶしはおいしくなく、本来のにぼしやかつおぶしの風味がだし汁に出てしまったことを理解することができた。
- ・作り方については詳しく確認したが、火加減についてはあまり意識させなかったため、沸騰が続き少ししょっぱいみそしるになってしまった班がある。

IV 研究の反省と課題

本部会は、低学年・高学年の学級担任や特別支援学級の担任で構成されているため、それぞれの子どもたちの実態に応じて授業実践に取り組んできた。低学年では、子どもたちの身近にある食材を利用したよもぎだんごづくりや初めての学校給食における準備やマナーなど。特別支援学級では、友達のお誕生日のためのお祝いや月見団子作りをした。5年生の家庭科の学習においても、味噌汁の具選びについて消費者の視点から考える実践も行われた。

低学年から、「食」を取りあげることで自分の食生活を自分なりに意識することができた。そして、積み重なった知識や認識が、家庭科につながり、家庭科での実践的・体験的な学習活動を通して学ぶことで、よりよい食生活の実現に結びついていくのではないかと考える。

(1) 成果

- 「食」は生きていくうえで欠かせないもので、低学年から指導を継続していくことの重要性を感じた。「食」に統一した研究実践を行うことにより、部員が低学年からの系統的指導についてお互いに学び合うことができた。
- 家庭科での実践以外に、他の教科や領域でも「食」に関わる指導ができることを知ることができて参考になった。実践は、子どもたちの実態に合わせた工夫があった。また、実践授業の交流を行ったり意見交換したりすることで指導のヒントをもらい、自分の実践に生かすことができた。
- 健全な食生活についての意識を高め、正しい知識をもたせる工夫を発達段階に応じて行うことにより、子どもたちの食事についての関心や意識が高まりつつある。
- 家庭と連携した取り組みを行うことにより、各家庭に子どもの食生活や基本的な生活習慣、体力について、より一層関心をもってもらえる機会となった。
- 研究内容の一つとして、実践的な調理実習を行うことにより、部員の情報交換と指導内容の拡充を図ることができた。炊飯器を使った調理実習では、手軽に行える実習方法を学習し、子どもたちが自分や家族のために楽しく家庭で実践することができる内容であった。
- 実践的・体験的な学習を系統立てて行うことにより、子どもたち一人一人が食への関心を深め、食の大切さを理解したうえで、自分の力で望ましい食行動を実践できるように成長していくと感じている。

(2) 課題

- ◇実践報告の中に家庭での実践を行う内容があった。授業時間が削減されたこともあり、学習したことを定着させるためには家族の協力のもとで、家庭での実践が必要不可欠である。しかし、家庭環境が様々な児童がおり難しい面があると感じた。
- ◇授業で学んだことがらをもちに、普段の自分の生活を振り返り、必要に応じて改善していく力を育てるために、家庭への啓発と連携をさらに図っていく必要がある。
- ◇食事が子どもたちの生活習慣の乱れや肥満傾向増大の一因であることが懸念されていることを考えると、食指導における課題としては、食に関する内容を家庭科で取り上げると共に、学校給食や他教科・領域での指導でどのように発展させていくのか学校教育全体との関連への工夫をさらに図っていくとよい。
- ◇健全な食生活を築いていく力を育成する指導の一環として、賢い消費者としての力を育てる指導も発達段階に合わせて行っていくとよい。
- ◇低学年から高学年の家庭科の学習へつながるように、栄養教諭と連携して進めていくように意識して取り組んでいくとよい。
- ◇「食」への様々な情報が氾濫する中で、正しい知識を子どもたちに教えていく必要がある。

